

## 紀海音と文耕堂——近松以後の競合

### The fiction of Kino-kaion and Bunkoudou: after Chikamatsu

葛 綿 正 一

KUZUWATA Masakazu

豊竹座に属した紀海音（生没年一六六三～一七四二、作品発表は一七一〇～一七三三）、竹本座に属した文耕堂（生没年未詳、作品発表は一七二〇～一七四一）、ともに近松門左衛門が確立した様式に倣っているだけである。しかし、それぞれの作品には海音の主題というべきもの、文耕堂の主題というべきものを探り当てるができるように思われる。本試論ではそうした点を検討し、豊竹座、竹本座の芸風についても考えてみたい。前者の引用は『紀海音全集』全八巻（清文堂出版、一九七七～八〇年）によるが、後者は『近松全集』十四（岩波書店、一九九一年）、『新日本古典文学大系』九三（同）、『竹本座浄瑠璃集』二、三（叢書江戸文庫、国書刊行会、一九九五・六年）、『義太夫節浄瑠璃末翻刻作品集成』（玉川大学出版部、二〇一〇～一五年）などによる。

先行研究としては近石泰秋『操浄瑠璃の研究』（風間書房、一九六一年）があり、文耕堂は心底を「劇的最高頂点前後に於いて始めて明かす」手法が宗輔に比べると弱いという。横山正には『操浄瑠璃芝居の研究』（風間書房、一九六四年）、『近世演劇論叢』（清文堂、一九七六年）があり、文耕堂単独作の四作品においてはすべて三段目切に女の犠牲死が仕組まれているという。諏訪春雄『近世戯曲史序説』（白水社、一九八六年）は文耕堂単独作について、最初に設定された第一の筋よりも次に設定された第二の筋がその後の劇を主導する方法を指摘している。また富田康之『近松と海音』（北海道大学出版会、二〇〇四年）は表現と趣向について検討している。

## 一 海音の主題——記憶としての大坂

大坂出身である紀海音のドラマとは、波の音が響いている点に特徴があるのではないだろうか。そのことを確認するため、まず『新板兵庫の築嶋』（享保元年、全集四）に注目してみたい。「況や邪虐残亡の猛威もたかき平相国、清盛入道浄海の悪行おほき其中に、皇居をせつしう福原に都遷のあらましを、伝へ聞こそ恐れあれ」（第一）と始まる本作では、清盛による海の埋め立てが題材となる。国春の娘が重友へ興入れるため祝言の道具が揃えられ「筆の海たたみこんだる金屏風」が並ぶが、名月姫は恋人の家包に奪われる。海を埋め立て往来の自由を確保しようとする清盛は、人柱を立てる。

其比平家の大将清盛入道浄海は、官禄先祖に抜群し所から迎名も栄ふ、福原に内裏を建皇居を移し政道を、心の儘にとりおこなひ、権に乗じてはかりなき、和田のみさを平地となし、民家を立て往来の旅泊の自由を得せしめ、西国四国の湊と呼四海に功をほどこさんと、七ヶ国にくはやくをかけ五万の人物寄集り…（第三）

築嶋の人柱を非難した国春は捕まり、娘は嘆きを深める（「名月姫道行」）。国春を救うため、重友も家包も協力する。民の欲する所は天かならず従がふといへり。然るに相国浄海公、私意の利名を専らに築島供養所見の為、和田のみさに飯屋をかまへ、御一門の公達近習召つれ出給へは、松王は新参に召出されて出頭の、威義を改着座する。奉行には瀬の尾の太郎阿波の民部立合て、人柱の輩に沈の石を擲付、けいこきびしく守りゐる。（第五）

松王は自ら海に身を投げるが、その自己犠牲によって救済され「島建立」が可能となる。このようにみえてくると、陸と海の対立が紀海音の主題として浮かび上がるのである。本作の結びでは「御ほとけのはうべんの道の往来の大みなと、その名もたかくつきじまと今の、世迄もさかへける」と港が強調される。それに対して、竹本座の『太政入道兵庫岬』（元文二年、竹本小出雲、竹田正蔵）では大地の豊かさが強調されている（「是ぞ天下の宝島、五穀豊饒民安全万々、歳とそ祝ひける」）。なお、『兵庫の築嶋』の伝承については阪口弘之『古浄瑠璃・説経研究』上巻（和泉書院、二〇二〇年）を参照されたい。

紀海音『枕久末松山』（宝永七年以前、全集二）は波が越えてしまいかねない陸地の危うさを秘める。「水をくみや

らはようやよや小川でくみやれ、小川小石川ころびあふてころびころびかかるとよへ…」(下巻)。文耕堂の『元日金歳越』(享保二十年)は同じ題材だが、こうした細部はみられないだろう。

お染久松を扱った『袂の白しぼり』(宝永七年、全集一)では涙が存在を崩壊させかねないし(「かりねの夢にいまはしひつらさにかふないたゆへ、今につふりがふらついてどうもおきてゐられぬ…」地獄めぐり道行)、『熊坂』(宝永七年以前、全集一)の結末には「忠心の海は埋がたし、打せては自が仁がかける」とみえる。

実際の心中事件を扱った『なんば橋心中』(宝永七年、全集一)では水が存在を押し流しかねない。「其ことのは水になしうかうかとつとめさせ」と八塩は恨み(中之巻)、「今はなんばばし、よしなしくさの、のこりなば、わらひくさとやながしやる、かゑらぬ水に身のうへを、かくとはたれがおしゑけん」と恨んでいる(「心中さいごのしほとき」)。紀海音においては潮時が決定的に重要であろう。死の間際「あらいたはしやおやち様世を海ばたに年月を、さむいづめたい手はさする」と振り返る点も興味深い。

赤穂浪士を扱った『鬼鹿毛無佐志鑑』(宝永七年頃、全集一)には「時刻うつさずはや入れと合図の詞浪といふ、心へたりと梶右衛門へいにはしこを打かけてそろりそろりとのぼりける」とあるが(第五、「浪」こそ海音の合図にちがいない。

北条政子の活躍を描いた『鎌倉尼將軍』(正徳一・二年頃、全集一)の冒頭には「かいすいまんまんたり」とあり、危機を煽っている。「情の水のなみさはぐ、あだなうきなはたばたて」というのが後家としての政子の危機にほかならない。「母は扇子をいただきて御代をことぶく一さしや、四かいなみを打おさめ給へは国もうごかぬ」状態になり(第四)、尼將軍が江の島まで帰陣するのが「太平のかたち」とされる(第五)。

観音の法力を説く『三井寺開帳』(正徳二年、全集一)に「寺は諸法のかみにたち海は福じゆのなみをたたゆ」と始まる。「ふだらくやしきうつなみ」と順札歌が続くが、海は危険性を伴っている。「子を思ふ、思ひの海にかちとつて、五十余りのすらう人たれ共いざや白かべの、ここやかしこと雨やどりしばしはれまを待いたり」(中之巻)。この「思ひの海」があるところに波が立つ。「とびめぐりをぐりめぐりてみづのなみ、うづまく布にひんまいて、今こそ本望とげたる」というのが結末である(下之巻)。

蘆屋道満が安倍晴明を陥れようとする『信田森女占』（正徳三年、全集一）では「男をくふは大海の水だくさんな水性」という占いに注目せざるをえない（第三）。世界を解き明かすのが「龍宮せかいの秘符」とされる（第四）。

『傾城三度笠』（正徳三年、全集一）は近松『冥途の飛脚』の改作だが、海音的な特徴が垣間見える。それは涙の海であり、波が打ち寄せているところであろう。「津の国の、なにはの事か色ならぬあそびたはふれまどといふ、中に情の様々や、南のきしによるなみのうかれて、身をやすて小舟待とはなしにそね崎の、よねに身をうつきやくも有」という（中之巻）。

「近年四海をだやかに」と語られる『曾我姿富士』（正徳四年、全集二）の特徴は、曾我物に涙の「波」が及んでいる点であろう。「河津殿のましませば汝をこそ法師にし、五郎は跡をつくべきにふしわせなる時宗や、いいかいなき親子やといかりつかこつ老の浪、たつもたたれず親子の人とかふ泪にあたりけり」というのは兄弟を教え諭そうとする曾我介信である（第三）。「鬼王兄弟五月の涙」の段があり、「我々がちかよりたらはおふたりの、ねらはせたまふたよりもならふとたくむ事までも、さきにさとつてよせつけぬ、ぶうんのつよきすけつねやとせんかたなみだに、しづみけり」と語られる。

仁明天皇の時代、六条右大将有雄の専横とその娘六条姫の愛護若に對する執着を描く『愛護若罍箱』（正徳四年、全集二）における波の主題をみてみよう。「さざなみや、志賀の山かぜ吹すさみ、釣する海士の舟ならでこがれこがる胸の火に、汐こそ焼ぬにほてる姫…」とあるが（第四「あいごの若道行」）、愛護若には二人の妻がいる。「六条姫は冥途の妻、此世の妻はにほてる姫」という関係である。六条姫の執着はすさまじい。「時に山鳴、滝浪はうづを巻上まきおろして、六条姫はこつぜんと波の上に頭れ出…」祈りによって愛護若君と湖照姫は蘇生するが、ここでは琵琶湖が荒れ狂う海になっている。

『山姥太夫恋慕湊』（正徳五年頃、全集二）の姉弟は水中に沈む人柱のようだ。「なふ我々はしさい有二人もろ共此川へ、身をしづめんと計しに、思ひもよらぬ此舟にしばしが内もたすけられ」と語っているが、その舟に攫われてしまふ。

アア口をしや腹立や若君達をむぎむぎと、とらるるのみか我み迄をのれひつふの人かいめ、うたれてしぬる一ねんのおにともじや共なりかはり、今におもひしらせんと、はをくいしぱりめのひかりいかれるこゑもなくこゑもかへらぬなみにうたかたの、あはれはかなき身のはてはあとしら、なみとなりけり。(第二)

人買い舟に攫われるところには波音が響いているのである。由良の湊の長者、山椒大夫のもとで安寿は「汐くみ」を強いられるが(第四「はつ山入」)、そこから逃げ出したつし王が寺に駆け込む場面にも波音が響いている。「善悪はひとつ入江のみをづくし、立るかいなきよの中を捨ぬ人こそすつるなれ、昔の冠かり衣も、かりの姿のかざりぞと思ひ程かでくろかみを、あつめてなゑる色づなもあじのりけんに切さげは、生死ねはんの夢の夢第一義天の月影は、ゆかさうをうのまどにみつあじや一げいのゆかのうへ、無明の浪の風たへておこないすましおはしける」(第五)。『山姥太夫葭原雀』(享保三年、全集四)もほぼ本作と同様である。

『甲陽軍艦今様姿』(正徳三・四・五年、全集三)は信玄が武田家を統一するまでを扱うが、「海」と無縁ではない。「おのれは氏もすじやうもなく海の中から生れ出、手あしもなくかしらもなく人を多はするばつかりと、愚人の目には見ゆれ共」と語る山本勘助が登場するからである(第三)。

『新百人一首』(全集三)の冒頭「菊合せ」に「なにはの海に龍王の、名はいや高く花は又いとのどかに荒海の、浪にうかめる青龍刀」とあるように(第一)、浪花には海が及んでいる。「アアお姫様にもふがないない、家来が忠義に死るのが何歎るる事が有、うかうか長いあそばして若も敵が参つたら、丹下がか程に致たる心を水になさるるか」と語る丹下は自ら死を選び、息子と姫君を助ける(第三)。「陸路ながらも袖の海、よるべしられぬうさつらさ」を抱え二人は逃れる。「今か今か」とぬ人を、まつおのうらの夕なぎにやくや藻汐の、身もこがれつつ……(第五)とある通り、たえず浪に洗われる敷島の国は和歌によって守られているのである。

『末広十二段』(全集三)は義経を主人公とする。「コレ申牛若様のふ若君様我君と、おしうごかせ共ゆすれ共こたへとてあらざれば、女ばう今は涙川堤もきれてわかへり、わつと計に泣出し……」とあるが(第四)、「堤もきれて」というところに陸と水がせめぎ合う海音的なイメージを探り当てることができる。「平家の内に八九年けがれ切たる腹わたを、洗ふてみせ」というのも凄まじい。「天下太平国土安せんのためなれば、げきどを四かいにおつばらい、

ねがひをかなへたび給へ」と義経は寺社に祈願している（第五「牛若寺社めぐり」）。

近松『国性爺合戦』の趣向を取り入れた『傾城国性爺』（享保二年、全集三）の主人公は「しげれる松山浪こゆる、小性ざらひのお大名」橘清澄であり、太夫角山との間に子供まで儲けているが、家臣の鬼拉牛蔵が乗っ取ろうとする。「牛蔵様あしがきさま御えんぐみはきはまつた、三国一と同音にちか時あぐる鯨のこゑ、ろくろくとして雷ていののきばをめぐるごとく也」（一段目）。この鯨のごとき牛蔵のせいで追放されたのが、女之介である。四段目「おりく道行」では若君を抱いて琵琶湖をさすらう（二日につれて大津を出しかちもろも、立もなをさず其儘にいとま浪間にいざりする、片田の、浦にぞ着にける）。このおりくと女之介の活躍によって牛蔵は討ち取られるのである（五段目）。

継体天皇即位前の混乱を描いた『本朝五翠殿』（正徳五年頃、全集四）では、大坂近辺の名所が扱われる。まず「摂州有馬と申山中に、此比温泉涌出して万民是に浴するに、其百病をのぞく事かんはつの草木のかんろの雨にあふごとく、彼土地をさつするに武庫六甲のみねつづき、其山のこがねの精おんせんと化し出る」と語られる有馬温泉である（第二）。温泉の効能で天皇の世継ぎを懷妊した照る日は「波かぜの、立たりゐたり臥まろび」嘆きを深める（第三）。

次に住吉大社であり、「西の海あをきが原の波間より、願れいます和魂爰に移して真住吉…」とその創建が語られる（第四「てる目のまへ道行」）。住吉行幸の際、悪王子武彦は天皇を討とうとするが、失敗する。「かやぶきたてるみやしろの、西にむかはせ給ひしは西海四海の百舟を、守らんと有誓とかや岸の姫松君か代は、千世に八ちよをさざれ石、岩ほと成てこけのむす迄…」とみえる（第四）。

越前の出身の天皇は、近松門左衛門に似ていなくもない。本作の末尾には「浄留理古今の序」という歴史が付されており、浄瑠璃作者への讃歌になっている。

『殺生石』（享保初年、全集四）もまた水の危機と無縁ではない。海を渡ってきた妖狐の話だからである。七夕に関しては「しきしたんざくいろいろにかけ奉る竹の葉は、さざなみそらにはなばなし」と語られ、恋愛に関しては「人

しら浪としのびつつせど浦なみにたつなみの、ひるはめなみのしげければ、よるよるなみにあふなみのひよくれんりのかたらしいは、いとしかわなみやるかたをなみあらぬころはいそうつなみの、こひのふちせもあさからざりし」と語られている（第二）。第二は「上野のさの舟橋かけてのみ、恋渡るてう浮名立女浪男浪の打つれて」と始まり、「重虎道行」には「ほにはしらせて、くはなふね浪もしづけき君が代」とみえる。「水のさかまく所をば、砂有としるべし」という通円の茶道も興味深い。

鎌倉を舞台にした『鎌倉三代記』（享保三年、全集四）にも波は打ち寄せている。「忠臣しるしそろへ」で「四海太平国はんじやう、さざ浪やさざ浪や、浜のまさごはつくるとも、源氏の御代はつきせじ」と唱うが（第二）、將軍頼家は比企能員に陥れられるからである。荒武者たちが「龍象の波をけたてるごとくにて、一もんじにかけ来り大だちふつて立かかれは」大波が立つことになるだろう。人形からくりの場面には「あれあれあそこを見さつしやれ、西から南へおし渡つてまんまんたる大海も、おつくるめて若殿の御せんすいも同じこと、鯛も有るびもあり鰐ぶしの生たのが、ぴちぴちとはねまする」とみえる（第三）。しかし、若君一幡を儲けた若狭の局は頼家のもとから立ち去ってしまう。それが第四「わかさの局道行」であり、「悦びの浦歎の浦、恨を誰に由井が浜波なき、方に立波…」とある。「げに世の中はあだ波の、よるべはいづく雲水の、身のはていかにしらざりし、御いたはしや頼家卿、けいらうぎよくじゆの閨の内二世の三世の七世のと、たがひにちぎりかはされし若狭のつばね何となく、やかたをまぎれ出給ひ、今に御ゆくゑしらざれば…」（第四「まよひの姿絵」）。若狭の局は父の比企能員が若君を利用し政権を奪い取ろうとしていたことに苦しんでいたのである。

義経の風評が頼朝を脅かす『義経新高館』（享保四年、全集四）は平泉陥落に重ね、大坂落城を扱っている。

そもそも此ひらいつみと申は、日本ぶさうのようがい四じんさうおうの名城なり。ひがしに山をいただきて朝日かかやくしやちほこは、魚鱗のそなへおのづから、たとへて見るもたくましき、北にながるる衣川、水とうとうと高館に、よせてはさつと引しほのすさきに、あそぶ友鶴は、これくはくよくの詠ぞかし。（第二「軍配団」）

この地形が大坂に重なることはいうまでもないだろう。しかも、「屏風八景」には大坂の光景が描き込まれている。「げに音にきく津の国の、なにはのうらの春かぜに、たかしのはまや住よしの松の、みどりもひとしほに、さきてか



かれるふぢなみはなつのていかと打見えて、雲井のよそのほととぎす…」（第三）。結末でも「波」が打ち寄せる。「金銀のより糸にさざ浪打たるかざりぶさ」がみえ、「明石坊、二つに成て須磨の月、波爰もとやうたかたの哀はかなく成にけり」とある（第五）。

『神功皇后三韓責』（享保四年、全集五）の老臣武内は「一張の弓に四海をやすんずる」存在だが、三韓を責めるため「蒼海万里のふなち海上風波のかけ引を、調練したる水主楫とり漁父網引のたぐひ迄」探し出される。神功皇后は「心のむかふ所にはいか成風波も凌べし」と鼓舞し（第一）、武内は「我身は帝都のしゆごながら心は通ふ西海道、波に座するがごとくにて、一心の祈願をおこし」ている（第二）。「四かいちんが家なれば」と語っているのは神功皇后であり（第三）、翁の神は「皇后の賢明を四海の外にひろめん」として裏切り者を熱湯に投げ入れる（第四）。潜水した名草の海人は「其身は波にぬれながら」二つの玉を献上し、その玉によつて海原に陸地が現れるが、これこそ紀海音にふさわしいイメージに思われる。「汐ひる珠のきずいを見せ御陳を守りましませと、海原遙に投渡せはういつ、ながれつ引しほの、濤々たる波たへて、忽ひかたの平砂と成千里ののべのごとく也」（第五）。

三勝半七の心中を描く『二十五年忌』（享保四年、全集五）には「なむあみだなむあみだ、なむあみだなむあみだひとりゆく、ふたりつれ立みつせ川なまみだ、なまみだなまみだわたりも、とをきごくらくのぐぜいの、ふねに、さほさして、ねはんのきしにみだたのむ」とみえる（三かつ半七死出の道行）。念仏は波のリズムを伝えるかのようだ。

源頼光の後継、頼信の活躍を描く『頼光新跡目論』（享保四・五年、全集五）は「其源は清涼と、四海に入て、潮をなめ同一甘味の民と君、国をなびかす旗竿の、八重たつ雲と、ひるがへる、武将撰津守頼光…」と始まるが（第一）、この源氏の血統が危機にさらされるのである。

「無為」統は天理の常治乱は地道の変」（第三）という『鎮西八郎唐土船』（享保五年、全集五）では保元の乱に敗北した為朝が琉球に渡る。「為朝ほとんどけふにいり宮の御手を引参らせ、万事は其ほう頼みいるはやとく、とくといふしほの、かいとりのべて、和田の原、八十島かけてこぎ出る、あまのつり船恋のふねゆられゆらるる浪のうゑ、



思ひやるこそはるかなれ」(第四「親王船路の道行」)。この波の動きが本作のテーマにみえる。「袋中法師が神道記に琉球龍宮音同じ、則同所成べしと、云しは実としりながら見ては驚計也」とあるが(第五)、大地から海洋へというのは紀海音にふさわしい演劇であろう。

後冷泉天皇の時代、播州のお家騒動を扱う『日本傾城始』(享保五年、全集五)には波のドラマが垣間見える。「波風を立てぬが家老の忠義よ」と佞臣が語り、「夫婦諸共爰かしこ昔を忍ぶ西のたい、情の海の奥座敷」と夫婦が語り合う(第三)。継母のせいで居場所を失った息子は「万代を波のしらべのどうどう、からろの音はさつさ、からころころからことの、とまりもあへぬたび心、ちぢの思ひ」でさすらう(第四「頼基卿道行」)。「遊女のうたふ舟遊びささら波立波立波もあはれ世にあはばやおもしろや、実相むろの大海に、五ぢん六欲のかぜは、ふかね共随縁真如の波の、たたぬ日もなし…」というのは遊女が示してくれた世間の実相であろう(第四)。結末では継母が「あらかねの土にも入たきふぜい」となり、「今迄流浪の身となす事、ゆるしてたべ」と語られた頼基が家督を相続するのである(第五)。

聖武天皇の時代、摂津のお家騒動を扱う『三輪丹前能』(享保六年、全集五)では「錦をひたす生田川波に秋かうたがはる」という(第二)。難題を受けて、「二つつづけて射通せば、とりは羽たたくさざ波や、ちつてくだけで水鳥の、水をはなれてはたはたはた、ととばんとするに矢はつよく水にはたりと落たりしは、古今無双のせいびやうと川の、東西ざぎめきて波かぜ、松風さつさつの声さへ天にひびくらん」とみえるのは波のドラマであろう。「水と波とのへだてをもながれは同じ」というのが真理として示される(第四)。結末では摂津の国武庫の庄、「近国他国くんじゆしてうしほのみつる」とき敵討ちが果たされる(第五)。

源頼義義家が安倍貞任宗任を討つ『八幡太郎東初梅』(正徳六年、全集六)は「吾聞勇に五ツ有、獵者の勇有漁人の勇有、工匠の勇有典刑の勇有大怒の勇有四海をたもち天下を治るの用にたらず」と始まる。「弓矢の妙を得たる事、皆是四海の安泰を願ふが故にたしなめり」というが(第二)、「四海の安泰」が重要なのである。第四道行では「四つの海、浪もうこかず明渡る」と強調されている。そのために水の試練が必要とされるのであろう。「おちくる水にう

いつ、しづんづ、しづんづういつすでに、あぐんて見へにける、不しぎやな川なみたちかへり、浪まに出る、じやたいのいきほひくれないのしたをふりたてふりたて張良目がけてかかりける…」というのが、それである（『翁軍談』）。「斉の太公履を錫はつて、東の方海に至り」と始まる『坂上田村麿』（享保六・七年、全集六）もまた「四海の安泰」が主題となっている。「軍法道しるべ」が行われ（第二）、「聖徳四海にあまねき故、悪路王がめつぼうは指をかぞへて近きに有り」という（第三）。第四「道行片輪車」は「思ひしむ、身にくらべばや四ツの海、ひとりひとりにくみわけて、心になかなふ汐時を」と始まり、第五で「みち汐のときをどつと」上げるのである。

天智天皇の悪逆の皇子を扱った『大友皇子玉座靴』（享保七年、全集六）は「御代をことぶくうたかたの、波も静けき瑞穂の国、人王三十九代の聖主、天智天皇の御盛徳、申もなかなか、おろかなり」と始まる。「誠に四海太平に、朝廷の拝賀かはりなく、めでたき年を重ねる」というが、王位は三年間空位のままで靴を祀っている。波が静かであるためには岩が堅固でなければならない。「さよ姫が、石に成たるしんじつを鏡にせよとの印として、岩ほより猶みさほ成心」をもつ姫君は、大友皇子に結婚を強制され、拒む。「天津おとめのひる返す、袖をかざせばたちまちにとへは山を海となし、いさごをみねにつく事もたな心におぼへたり」とあるが（第四）、山が海になり海が山になるのは海音にふさわしい奇蹟にちがいない。

『心中二ツ腹帯』（享保七年、全集六）では「主君の御恩親のじひやうふゑ孝の三つの海」が強調されるが（第一）、そこに危険性が潜んでいる。

なには津や、にぎわふ門もさ夜ふけて、いびきくらぶるかねのこゑ、数はいくつぞ八軒や、あまのいさりとかがけたる、宿のあんどふしんしんと、浜風あをつあがりばに、おちこち人の下りぶね、押ならんでぞこぞりよる、船頭ねふりをよびさまし、サアサアついたぞあがらしやれ、おきわすれないやうに、諸事あらためてといふ所へ、泊り宿のていしゆ、三笠や与次兵衛出来り、まつたまつた船頭衆、あらためる事が有…（第二）

「あらためる事が有」と危機が出来るのは、海と陸のはざまにおいてである。姑に離縁された妻とともに、半兵衛は死に追い込まれる。「捨るに極めし、身の上も、そぞろに心ぼそげにて、三途の川は目の前の、麦吹風のさざ浪や…」（第三「道行ほしのかず」）。ここには海の危険性が迫っているかのようだ。

『玄宗皇帝蓬萊鶴』（享保八年、全集七）は安祿山と楊国忠の専横を扱う。「五百年に一度すむ、黄河が毎日清めばとて、逆心変ぜぬ安祿山」（第二）とあるように、水が澄んでも安祿山の逆心は止むことがない。だから、楊国忠を刺し殺し、安祿山を滅ぼすほかはないのである（「楊国忠をさし殺し、諸人の恨をはらされば四海は残らず味方となり、たたかはずして安祿山、ほろびんは必定……」第三）。

海音は禅宗を学んだ際に「他日若し能く法器をなさば、舌頭湧出せん海潮音」と評され、それを号としたものらしいが（屋号は鯛屋）、海の主題を招き寄せている（「1」）。浮世草子『四民乗合船』（正徳四年）の序文を書いたのも、そこに「硯の海」があつたからであろう。『今宮心中丸腰連理松』（正徳元年夏、全集二）にみえる「硯の海大ふく帳」は海音の執筆環境を示唆する。さらに注目されるのは紀海音における都遷りの主題であり、次に検討してみたい。

## 二 都遷りの主題——演劇と都市

桓武天皇と弟の皇位争いを題材とした先行作に『平安城都定』（宝永元年）、『平安城都遷』（宝永九年）があり、海音の『平安城細石』（正徳五年、全集二）もそれに連なる作品である。冒頭をみてみよう。

抑人王五十代桓武天王と申奉るは、天にかなへる御せむ徳国をめぐみ民をなでて、四方に治る八島の浪しづかにてらす日の本の、千よにや千世にさされ石岩ほと成て、山城の、国土とよみて万代も上下万民長岡の、花の都とみそなはし、皇居をうつし給はんとの御心、ばへこそ頼もしけれ。

（第一）

氷上の皇子は兄の后に横恋慕して皇位を狙うが、阻止され、めでたく平安城が建設される。『平安城細石』『新板兵庫の築嶋』など、なぜ海音は都遷りに拘泥するののか。それは都として豊竹座の基盤を固めたいからではないだろうか。『袂の白しぼり』のお染は「此大坂にいくたりか、今迄心中おおけれどしなぬさきから此ように、歌多ざうしにのせられて……」と大坂を強調していた。

大友黒主の謀反をあばく『小野小町都年玉』（正徳三・四年、全集二）では和歌の力が強調される。「出其比は無神無月天下大きにかんばつして、土ひびはれ石やけ草木かれてこがせるごとく、大河小河にながれつき船はくがちの見

物と成、上一人より下れいみんなに至る迄、天に雨乞地にいのり海神河伯を祭りても、猶一てきもふらざれば、かつぎよのどろにあへるがごとくくるしみ歎く計也」(第二)。和歌の力によって雨が降るのだが、こうした水と土のドラマは紀海音にふさわしいものであろう。

『仏法舍利都』(全集二)は仏敵の守屋を退治する話である。「よの中は何にたとえん朝ぼらけ、こぎゆく舟の跡の白なみ」とみえるが(第二)、聖徳太子は無常の波の上を越えていく。「仏法ふしぎのくりきにて、うみにもあれ山にもあれかけこゑ、とびこへあゆみゆく、くつわのをとはりんりんりん、あをりのをとはどうだうだう、どつとうつなみひくなみをこへ…」(第四「聖徳太子飛行駒」)。そして「御身は福じゆ海むりやうぐぜの大願時いたれり」と宣言される。

源頼光が平安盛を討ち取る『花山院都翼』(享保元年、全集三)で描かれているのはまさに都の危機にほかならない。化生の女を川に取り逃がした公時は「たとへ大海おきつ浪、八重の汐路をくぐりぬけ」たとしても探し出すと怒りを募らせる。「ほのぐらく煙の浪か夕立の、うづまくけしきものすこく吹くる風は肌をつき恐ろしなん共愚也」というのは悪霊の出現である(第四)。「天子に無体のほざきことぬつくり四海をにぎらんとは、位ぬけのうさいがき」と早水七郎が罵っているが、快了僧都が花山天皇を陥れようとしたのである。

呉王夫差と越王勾践が登場する『呉越軍談』(享保六年、全集六)には二つの集団の対立が描かれるが、それは竹本座と豊竹座の関係を示唆するものではないか。「なぎさにへいさのらくがなが、よせくる浪におどろきてばつと立ては、さアアとをり、おりしりがほの有様は、廿五けんの糸筋にことち立たるごとく也」(第三「西湖八景」)。この華やかさは豊竹座のそれであろう。「西施も今はこらへかね、ナウ我妻と呼声も、心も通ふ船と陸、はるかに顔を見合せて、又あらたまる涙也、勾践はうらめしげに声打くもりの給ふ」とあるが、水を介した関係が海音の主題といつてよい。

鮑を食す呉王には「四海を飲の御吉相」が備わるともてはやされる。しかし、それも虚しい。「たとへは西湖に立波を人間水とながむれば、天人のめに瑠璃世界、餓鬼は火あんと見るとかや」と伍子胥の妻東施は語っているが、同

じ水であつても見方によつて異なるからである（第四）。

永享元年、異母兄ばんかい僧都の王位篡奪を阻止するため女の親王が男装する『富仁親王嵯峨錦』（享保六年、全集六）の冒頭にも「波」は及んでいる。「もみぢ葉の影もながれず大井川、ちらぬ梢わしがらみにして、忝も御震翰御短冊にそめ給ひ、都のにしき名どころの褒美に何かおしまんと、ながれにそふて投給ひいざや面々目前の、しゅかうはいかにと宣へは、兼定公を初としわれもわれもと公卿達、長歌短歌混本歌、詩連句漢和俳諧口、千言万句綴添色紙たんざくとりどりに、浪にうかみし有様は、陸奥山のこがね花入日に洗ふごとく也」とみえるからである。「都のにしき名どころ」が強調され、「浪」が立つ。この水が厄介なものであることは明らかであろう。第三の冒頭で「水は人にちかふしてしかも人を溺せ、徳はなれやすふしてしかもたしみがたし」という。

山名宗全の陰謀を扱い、水からくりが利用された『東山殿室町合戦』（享保七年、全集七）の主題はまさに「四海の安泰」である。第三は「砂頭に雨染むはんはんたる草、水面に風かるしつしたる波…」と始まる。「逆臣退治の還俗を、將軍多のいいわけはひとへに四海無事に有。其門出の楯鉾は赤松夫婦が心に有」といい、逆臣を退治するため足利義祝は還俗し、赤松夫婦が手助けする。「幸ひ御舍弟義祝公文武の御きりやうましませば、一旦武將にすへ参らせ政道の是非明らかに、西海四海の諸大名、足利の御代万歳と、うやまひなびく時節を待、御かくくの義は相違なく若君ゆづり請給はん」と語っている。

四海の安泰のイメージは、「ざしき八景」に反映される。「げに海山のふぜいをも、爰に、うつせばおのづから、ざしきにうかふ八景の中にかかやく、名所はまづ鏡台の、秋の月…」（第四）。だが、海音における蛇とは水を波立たせるものであろう。「忽に、はたひろ計の大じやとなつてさかまく浪は数十丈、水をふき上まきおろし只一のみにとひらめけば、かはずはおそれて毒気をふきかけ、あなたへはしりこなたへにげ、しんによの海に業障の泥をまじへし水あらそひ、めさましかりける次第なり」。

結末で山名の陰謀を暴くのは水にほかならない。「赤松いらつていふまいいふまい、先達てしのびをいれ両家の井戸をあらためしに、勝元が井戸には別条なく汝が井戸にはしそう石、今にとつきを残せしは逆心のしわざぞと、案に

てつする所なり」(第五)。こうして山名の野望は砕かれる。

山梨久国、近藤平次兵衛の陰謀を扱った『傾城無間鐘』(享保八年、全集七)は「民をやしなふ源うぢ、御先祖足利尊氏公四海を掌握有しより、爰にいたつて百余歳、子々相承の將軍職、頼兼公の御権勢、申も中々、おろかなり」と始まるが、水の支配は容易ではない。それを示すのが賀茂川の水である。

「八隅しる君がえいりよにかけられし、加茂川の水すこ六の、さいのめよりはつれもなき人をこひめぞままならぬ、されば將軍頼兼公過し子の日の姫小松、引わつらひし今川が妻かさねじと義理立てが、こづらにくひも色の意地情しりめを聞出せと、久国近藤かけ廻り広き都を北南、西六条の遊女町ふりよき松の名も高き、今川といふけいせいを跡先なしに根引して、写し植たる、花の御所、名さへ顔さへすがたさへ、ぬれでまろめし今川のながれの身……」(第二)。久国と近藤は今川という名の女を使つて將軍を操ろうとしているのである。二人の陰謀はそれだけではない。

第四は「かくて其後日向の前司久国はおのが心のまがりたる、其欲の釣針四海におろしゑばにかりし近藤が、孫茶々丸をすかし取大将の子と偽て、あらたに殿をかまへつつ諸大名へふれながせば、御祝義の献上物どんすまき物東京錦、さながら宝の山こかし終には天下をひんまろめ、懐にせん下工、逆意の程こそ恐ろしけれ」と始まるが、久国は「欲の釣針」を四海に下ろし近藤を操り、近藤の孫を將軍に据えようとしている。

海音が豊竹座に与えた最後の作品が『傾城無間鐘』であり、豊竹座の繁栄を寿ぐものである。しかし、それが困難であることはいうまでもない。「富貴理欲にかとうどする有名無実のむけんの鐘、千日千夜たたけばとて富さかよふかうろたへ者」と戒められている(第一)。近松『用明天皇職人鑑』における宙吊りの物体はむしろ無欲の鐘であり「夫婦妹背の守り神」であつたが、こちらは欲望の鐘である。

二つの力が引き合う近松においては島の形象が重要になる(『信州川中島』など)。そして島からの脱出が主題となる(『百合若大臣野守鏡』『平家女護島』など)。しかし、海音においては陸と海が対立するばかりであり、島を形作ることではない。その意味では、近松に比べて形象性が弱いといえる。

周知のように、大坂は水の都と呼ばれる。演劇とは都市を鼓舞するものであり、紀海音の作品は都市論的に評価されるはずである。東国を舞台とした『八百屋お七』(享保二年、全集三)は「むさし野のくさのゆかりといろふかき、

うき名しよこくにひろがりて、かたりつたへる末の代にあはれは、つきぬ物語」と閉じられるが、不吉な火災を大坂から江戸へと遠ざけているのかもしれない「2」。お七を「柱へくくりつけ四方からやき立て」るのが、『新板兵庫の築嶋』の人柱に対応することは明らかであろう。

### 三 文耕堂の単独作——梅、車、土

近松門左衛門が属す竹本座は東風、紀海音が属す豊竹座は西風と呼ばれ、それぞれ芸風を異にしていた。「操り段々流行し歌舞伎は無きが如し：東豊竹、西竹本と相撲の如く東西に別れ、町中近国鬚眉をなし、操りの繁昌いはんかなし」『浄瑠璃譜』寛政年間」という一節はよく知られている。竹本座の松田和吉が文耕堂に改名したのは、近松没後だが、その際、最も重視したのは「田」と「耕」の繋がりでであろう。近松の添削を受けた文耕堂は、いわば近松の道を耕すのである。

近松が添削した『善光寺御堂供養』（享保三年、竹本筑後）には「既に時刻に成ぬれば番匠の棟梁、本堂の棟に上り、諸天神司地守護神へ御酒奉り、日本六十余州大小の神祇御堂あんおんならしめ給へと、めでたき棟の槌の音ちやうちやうと打納、御堂の棟にそなへの餅きせんのかんしゆの真中へ、天長地久とまきにける儀式の程こそゆゆしけれ」とあるが（第五）、文耕堂はこの「堂」を秘かな目標していたのではないだろうか。実際、「堂」の一語がテキストに撒かれているからである。

まず文耕堂の単独作に注目してみたい。兄と異母弟が帝位を譲り合う『応神天皇八白幡』（享保十九年）では応神天皇の崩御後、残された御衣が八つの白幡となって翻る。

応神天皇と申シ奉るは、御母神功皇后の胎内にまします時、三ン韓を攻從へ帰朝の後ちに降誕あり。宝算は百余り十歳に満る御聖運、韓人に池を掘らせ厩坂の道を作らせ、耕作旅人の助となさしめ給ひしかば、国に飢渴の憂なく万民撫育の御功、御座の左りは武内の大臣、行年ン積つて三百歳、景行天皇より以来、五代の執政、右は真島の大連、其外群臣袖を連れ、堂上堂下に列座ある。

（第一）



「耕作」および「堂上堂下」には文耕堂の名が署名されているといつてよい。しかも、文耕堂のシンボルといえる梅が登場する。「大の尊は梅、宇治の大君は片葉の芦、非情の草木に方々の心おかれんやうもなし。梅と芦との徳を考へ位を定め給へや」と兄と異母弟が比べられている。この結果、仁徳天皇が即位し「大和京太平地祭」が行われるが、草木は文耕堂のドラマに色彩をもたらすことになる。本作では松田、竹本、梅田と松竹梅が揃う。次の一節も注目される。

渡辺や大江の岸の、北にあたつて床の尾といふ里の名の、今曾根崎と字して、爰にも建る宮柱、天照神の瑞籬に、髪も所体も十五六から、廿足らずの娘達何の願ひか、鳥居先よりお宮迄かざす袖に数とりて、お百度参りの大幣のひく手に神や靡くらん。同じ在所の五郎蔵が宮脇の田地鋤き返す。

(第三)

曾根崎の地名は竹本座のヒット作を連想させるが、五郎兵衛は竹本義太夫を暗示するのではないだろうか。「愚老年シ積つて六十六、五十年シの夜る昼田畠に心を委、天地の運氣に眼をさらし、風声水音迄考へ知つたる此勘作」とは文耕堂の自画像なのかもしれない。最後に「音頭」を取るのは勘作であり、「五穀成就安全に、治まる国こそ久しけれ」と閉じられる(第五)。

陶晴賢による大内義隆殺害を扱う『河内国姥火』(享保五年頃)は松田和吉時代の第一作だが、「土」が強調されている。義隆の遺児を匿う龍起は妻の姉、信夫を助けるため百姓たちを投げ飛ばす。

龍起帰りてつと入此有様を見るよりも、何かしらねど百姓共ひつつかんではどうと投、かいつかんで土にのめらせ、ふんづけつつの小気味よさなふ、よい所へお帰りとそぞろよろこひ給ひける。

(第四)

この一節は、後続の場面を導く役割を果たしているように思われる。龍起は若君の出世祈願のために灯す油を盗んだ老婆を刺し殺す。しかし、実は妻の高麗笛の乳母で、盗んだ油を金に換え龍起に渡していたことが判明する。

もみ合ふ内にかうべのわらも乱れちり、雨にうるほふ真土原ふみ上ふみしめふみくじらし、あしだかたかたはぬけ鳥、にぐるもにがさず又だきしめ、ぬくよりはやくゆん手のちの下、きつききあけにつらぬかれ、くるしみあがき手足をはり、大地にどうどはらばふたり。

(第四)

正体を知って助けようとするが、老婆は「此まましなせて下されと土にひれふし立上らず」、自ら果てる。そして、

乳母の亡霊は炎となる。

骨身にしてみてもわすれがたきさいこの念力、一心を此土にとどめ一団の火と成つて、今の難をすくふたり（中略）しがいは土にうづめ共、名はうづもれず末の世の、今にたへせぬかはちの国、ひらおかのおうばが火と語つたへ書つたへ、あまねくてらす火の光、現在不可説未来も又、不可説、不可思議不可量のきずいを、和国にとどめたり。

（第四）

タイトル「河内国姥火」は、この「土」から燃え上がっていたのである。「ヤア天からふつたか地からわいたか」と晴賢方は怯えているが、それは大地からにちがいない。

大納言清忠の謀反、足利尊氏と楠正行の和解、大塔宮遺児の即位を描く『車還合戦桜』（享保十八年）は冒頭で「春の林に秋到る、桃李風に任るの艶をひさしくせんや、朝の籬に暮来る、葵陽に向ふの心を改ず、日を懼るの日空積り、年有ルの年逢がたかりしも再び御園に咲匂ふ、左近の桜右近の橘、松も柳も色そへて光明院のしろし召、九十七世の百敷きや、都ぞ春の錦成ル」と語られる。ここで注目したいのは、「桜」や「松」が植えられている「御園」である。これこそ「車還」の桜が話題になる前提であらう。

なんと花の本に五緒車のあしらひ、屏風衝立テの絵にはあれど、都より外直に見るは此住吉、是が後だいこの天皇様の召た五緒車神主殿御拝領、此車からおこつた車がへしの桜：

（第二）

車で引き返すほど素晴らしい桜だというのだが、「車還」とはテキストを耕すための方法ではないだろうか。「車還」をするたびにテキストが豊かになるからである。大塔宮亡き後、その遺児は正体を隠して生きる。

我レ、宮の御子と生れながら、おく山里にて生長くもあの、むかしは見ず聞ず、かばかりの身とは知らざりし、是が祖父天皇の召れたる御車か、我レも世にあらば此車にぞ乗べき身の歩生足。人を恐れ世を恐れ姿をさらし名をけがす、此有さまは何ごとぞ：

（第二）

ここでは車に乗ることができる者とできない者の区別が生まれている。大塔宮の遺児が隠されるのは餅が名物の辻堂である。

はりまがた薦の細江は細けれど、誓は深き地藏尊鏡の清水の辻堂に、かけ奉る立願の一人り叶へは又二人り、五

人十人聞付ケて此比ちらちら参詣を、早付ケ込し荷ひ売仏ケも時のはやり出し、都仕出しの餅細工最味ことには人よりの：（第三）

「此辻堂と夕崎の不動堂を目録になぜ書き残いた、子細が有ふそれぬかせ」と問い詰められているが、「堂」がドラマの結節点になるのである。文耕堂のドラマでは「田」が危機を生む点も興味深い。

必々御姿を見あやしめられ給ふな、あれあれ向ふの田の畔を女の二人づれ、地蔵の参詣か見付ケられては破れのはし、此地蔵をふまへて元のごとく天井へちやつとちやつと、いやいや一度ならず二度ならず、ふまへておりたりあがつたり：（第三）

餅屋の二郎作は若宮を地藏堂に隠し、小夏を攫つて若宮の身替わりにしようとする。「二郎作は荷が大事、人の通らぬ田の畔をと荷ふて逃れば行先きに、又切ツたはと呼はる声なむ三宝と跡へ戻れば…」とあるが、この荷物箱に入っていたのが小夏にほかならない。

ところで、文耕堂のドラマにはしばしば車が登場する。タイトルとしては『仏御前前扇車』（享保七年）、『小栗判官車街道』（元文三年）があり、『三浦大助紅梅鞍』（享保十五年）には「道行老木の花車」、『猿丸太夫鹿卷毫』（元文元年）には「道鏡酒宴車」がある。

いで其体して見せんあの百日ツ紅ほりおこせ、承ると供の白丁土手に生たる百日紅、ねごしに堀てほりおこす、其隙に難波瀬尾、二足の牛を引きよせ尾さきをつにより合せ、百日紅の根を両方へおし分ケ、二足の牛の草秋に打またがせ、さんづの骨にからめ付ケ、からめ付クれば今をさかりの花の袖、人を立たるごとく也。

（近松添削、松田和吉『仏御前扇車』第二）

この牛裂きの場面こそ「扇車」の要に位置している。牛車によって引き裂かれようとする小督は、大地から掘り起こされた百日紅に等しいのである。

松田和吉時代の作『梅屋洪浮名色揚』（享保十五年）は最初期の梅の由兵衛物で、金目当てに丁稚を殺すが、冒頭で田地の由来が語られている。

難波津に借屋此頃され物にて家主ひぢをはるべの粧ひ、諸国の人の入込し御代繁昌のあまりぞと、北の田地を民

家に給はり、堂島新地と町作り、北浜中の島ならび、米とよねとの相場をゆるされ、爰によりくるぞめき人、身に相応の入札やあはぬ：

(上巻)

本作では由兵衛の妻が床下に隠される点も興味深い。堂島新地、小梅の家の床下で、お吉は由兵衛と小梅の関係を知ることになるのである。

豪商梶屋久兵衛が太夫の松山に馴染み災難が降りかかる『元日金歳越』（享保二十年）は、「耕」と「堂」のドラマとして要約できるだろう。なぜなら、種蒔きがみられるからである。

大切な金銀を煎豆同然にくはつくはつと打ツた所は、千石取ツても刀指身のならぬ事、大坂の町人衆は腹中が広いの、さればあのかねは親久右衛門より身が借て返弁のかね、御覧なされちよろりと百両蒔て仕廻た、ムウなんで又大分のかねお身は借たぞ：

(上巻)

遊廓丹波屋で梶久は金銀を豆撒きのごとく撒くのだが、これはドラマの種を蒔いているに等しい。種を蒔くのは、その文脈が十分に耕されているからであろう。蒔かれた百両分の一分銀は、梶久の父に返済のため本郷定之進が必要としていた金を梶久が貸したものであった。御蔵の金を使い込んだことを知った御用人鶴岡千右衛門は定之進を討ち取ろうとする。しかし、そうなると定之進に金を貸した梶久にも難儀が及ぶのである。松山は千右衛門に懇願しているが、松山にとって梶久との関係が続けることは「堂塔」を建てるような供養かもしれない。

千右衛門様、其頼もしい憐れのお心で、聞力ぬ顔してしんぜられればそれなりに済そな物、御了簡と申すは無理ながら久兵衛様がわしやいといい、堂塔建るも同じ事と思し召シ、沙汰なしにして下さんせと嘆すがりてとめける。

(上巻)

梶久や松山の懇願にもかかわらず、堅物の千右衛門は定之進を討ち取ってしまう。「我レは閉門どうぜんの此難儀」とある通り、梶久は座敷牢に閉じ込められるが、それは堂に閉じ込められるに等しいだろう。

なお、『和泉国浮名溜池』（享保十六年、宗輔・蛙文）にも耕作の主題が見て取れる。「用水の溜池八百八池、是大キなついで、東の山すそに四百五十計の大池を堀て用水にし、小池共を田地となさば、およそ一年に千石の徳用はたしか」という話を聞いた清十郎は「某幼ときよりも商人の内に住、耕作の事は曾てしらず」と考えるが、お夏清十郎

の物語に溜池干拓を導入したところに、この時代の状況がうかがえるだろう。

#### 四 文耕堂の合作——長谷川千四、三好松洛とともに

他の作者と分担した合作にも、文耕堂の署名というべきものが残されているのではないだろうか。『大塔宮囃鑑』享保八年、近松添削、竹田出雲・松田和吉の冒頭では北条氏を討伐するため酒宴が開かれるが、逆仁親王のせいで大塔宮は主導権を握ることができない。「春日山に時ならぬ白藤咲し例はあれど、紅の藤咲しとは古今例を聞ず、惣じて白きは源赤きは平家、逆仁親王は我々平家御取立申所、折しも赤き藤の咲く事、此親王を万乗の御位に即け申せとの神勅、花物いはねど疑ひなし（中略）若宮はおもなげに御涙ぐませ給ひければ、大塔の宮を始めとし堂上堂下村上彦四郎、叡慮をはばかり詞は控へにらみ詰めたる計にて、皆々拳を握りける」（第一）。色彩とともに、「堂」をめぐる構図に注目しておきたい。この後、計略が漏れた大塔宮は堂下に潜行せざるをえないからである。

冬の日に藤の花を咲かせたトリックはすぐに明らかになる。「惣じて冬の日に藤の花を咲する事、其木の根の土二三尺よけ、まはりを堀ごもく土と云物と入レかへ、折々其上にて柴をたき、毎日酒を根に懸れば、時分にかはらず花をさかす」。この意味で、文耕堂ドラマの色彩は「土」によつてもたらされるといえる。大塔宮は再起を期すが、それが果たされるのは奪われた旗を取り戻し、敵を大地に踏みつけるときなのである（「大地にぶち付足下にふまへ……」）。石橋山の合戦に敗れた源頼朝の再起をめぐる『三浦大助紅梅豹』（享保十五年、長谷川千四・文耕堂）において三浦大助義明の娘の名は「お土」であり、八丁礫喜平次の後家と再婚した又九郎兵衛が氣にしているのは「田地」の問題である。

三反ふたせの田地を敷金、此がきめんどう見るなら嫁つてこふとぬかしたから、がてんがいとかぬと思たれど、もし又定なれば大事もないと談合と、ふかふかと呼入レたが一生のふかく、彼田地はどぶじやといへば、村の庄屋年寄りが水論の出入りで隙が明ぬ。（中略）田地の埒が弥明ねば去こくる合点。

（第二）

丁稚長吉に身をやつす真田文蔵国安は源氏の秘密を知られ又九郎兵衛を殺すが、実は八丁礫喜平次の父親であつ

た。又九郎兵衛は源氏のために儉約し、七百両を用意していたのである。

紅梅の開花が頼朝再起の吉兆となり、頼朝は「田畠に植る物一ト葉にても猥にそこなふともがらは、天に背く罪人」と宣言する。

乗りとどめんと引ク勒ぬしに打くれ横にきれ、かけめぐりかけまはる人々驚き立さはぎ、立よればふみちらし山畠田地のわかちなく、ふみくづしふみうがてば、頼朝左右のみづつきをしつかと取ツて乗りしづめ、やうやうおり立ち給ひしかば、馬上もすぐれて見へ給ふ。

(第五)

タイトル通り「三浦大助紅梅豹」によつて頼朝の再起が果たされるが、それは「田地」をしつかりと守ることなのである。「好文木」と呼び換えられる植物こそ文耕堂の署名にちがいない。

金ヶ崎城で敗北した後、再起をはかる新田の家臣を描く『信州姨捨山』（享保十五年、千四・文耕堂）には「堂」の名をもつ人物が登場する。それが殺された「獅子堂勘解由」である。息子の文之進が仇の正体を探ると、姨が犯人であつた。

敵の有り家がしれたるとは、シテ其敵はいつくの何者、ヲヲ聞たいは尤、御身の父獅子堂勘解由を手にかけて討たるは、サア其討ツた敵めは、此姨でおじやるわいの、いざよつて本望をと、いふにびつくりやあやあと皆々、見合す顔と顔、文之進かぶりをふり…

(第三)

勘解由は姨の息子八郎を養子にしたが、実子文之進が生まれると冷遇するようになり、姨は勘解由を殺すに至つたという。罪を犯した姨は冠山に捨てられるものの命拾ひする、これが題名の由来である。自らの存在が思いがけない悲劇を招き寄せ、意図することなく父を殺させてしまった「獅子堂文之進」には文耕堂の名が重ねられているはずである。文耕堂と長谷川千四という二人の作者の關係がどのようなものだったか考えさせられる〔3〕。

一の谷の合戦を扱った『須磨都源平躑躅』（享保十五年、文耕堂・千四）では「師弟のよしみ」が語られている。「平家の一門ン詩歌管弦に長じ給へば、其道々の師匠たる堂上がた都に多く、師弟のよしみを忘れず野心有ル方も多かるべし」（第一）。勅撰集の選歌をめぐる俊成と忠度の關係にもそれがみられるだろう。

「堂上がた」との關係だけでなく、本作は「堂」の物語といえる。六条の御影堂縁起をもとにしているからである。

敦盛は扇折若狭の家に女装し隠れるが、若狭の娘が身替わりとなって死ぬ。「みらいみらいの後迄も、真実敦盛がみだいに定むる此桂子、是がふうふの印シぞと、泣ク々首をかきいだし、墨すりながし筆を染涙に墨は薄共…」(第二)。こうして身替わりとなった桂子を供養するのが御影堂なのである。「花を仏々に奉り娘が為にだう立てて、姿を残す御影堂妻諸共に敦盛の、名も永き世の今迄も、何阿弥かあみと僧ながらあきなふわざも此時に、浄土のゑんにあふぎ屋のうごかぬかなめの名物と、手ごとに開く折々にずいきの、風をぞ出しける」。

牛若丸が兵法書を手に入れ弁慶と主従の交わりを結ぶ『鬼一法眼三略巻』(享保十六年、文耕堂・千四)は「根は道無うして長く蔓り、名は翼無うして古今に飛ぶ」と始まるが、実際「名」が書き込まれている。

元来此松は伏拝の松と申し、此所より三所権現へは道も隔たり、耕す農人釣りするあまの暇なき身は、折々の参詣も叶はねば、此処を三処権現の伏拝み、伏拝みの松と名付け折々の幣を奉りし…

(第一)

伏し拝まれる松とは松田和吉の名と響き合うはずである。「伏拝の松」を説明しているのは書写山の性慶阿闍梨であり、後に弁慶は書写山で修行することになる。父の弁真と師の性慶から一字ずつ取ったのが弁慶の名にほかならない。結末は「常磐の松もあひにあふ千人斬の千の字を、千に重ねし国津民、万々歳の悦も諷ふも、目出たきためしなり」と閉じられ、松とともに共作者千四の名が書き込まれている。

『増補用明天皇職人鑑』(享保十七年、文耕堂・千四)も注目されるが、「出世景清」の改作『壇浦兜軍記』(享保十七年、文耕堂・千四)は「堂」の物語ではないだろうか。平家方の罪悪が強調されるのは、「堂」によつてである。

あの堂では五百人八百人、此堂では千人二千人、人ばかりも四千人程焼殺した其報い、火付けの大将頭中将重衡、京鎌倉に引渡され、はては衆徒の手にかかつて七日晒され首斬られた…

(第二)

「御存の我等眩暈病み、高い所へ上れば忽ちおこる、土の上の働は何ン也と指図には背まじ」と弱気を見せるのも、偶然ではない。平家方であつた景清は頼朝を付け狙うが、その警備は厳重である。「見渡せば、廻廊諸堂悉く、家々兵具を飾り警固、厳く見えたりける」。景清が妻の阿古屋と再会するのも「堂」である。「悪七兵衛景清が人に不審を打たれじと、普請通ひに身を窺す。在所大工の仲間に入り、背高背高と異名を呼ばれ、流れ渡りの手間仕事今日も傍



輩打連れだち、普請場をはや申の刻暮るるに遅き春の日の、ぶらぶらかしに立帰る、ヤヤたつた今迄くわんくわんした空であつたが、エエ聞えた、狐の嫁入のそばえ雨、晴らして往かうと辻堂に立寄る……」（第四）。景清は頼朝を討つために大工に変装している。「雨の足もと、弱々と旅に阿古屋が兄妹づれ、濡れみ乾きみ菅笠の辻堂にさしかかれば、互に見合す顔と顔……」と続き、雨宿りをした辻堂で偶然再会するのだが、これは「堂」が導く必然であろう。とすれば、景清が閉じ込められるところも一種の堂ではないだろうか。

櫓白樫梅の木の長さ一丈ある物を大地へ七尺堀入れ、上三尺の詰牢、櫓で蜘蛛手格子を切り組み、一尺二寸の大釘裏を返さずひつしと打ち、足を牢より外へ引出し入違へ、七十五人して引たる櫓にて上げ繫を打たせ、十挺詰鉄たうたう枢、大盤石を積重ね、首には根堀りの大竹筒に切つて被かせ身動きもならぬ、これ御覧なされ此牢を

（第五）

景清を捕まえれば「堂塔建立さへなささる」と門番は煽てられているが、景清は、このマイナスの堂から脱出してしまふのである。末尾には「尽きぬ八千代の松変らぬ色呉竹の、節を重ねて葉も繁る五穀、成就民安全治まる、国こそ目出たけれ」とある。景清は、この変節しない「松」に等しい。

『甲賀三郎窟物語』（享保二十年、竹田出雲・文耕堂）は岩穴に突き落とされた主人公が復讐を遂げる話だが、「土中の明りをするべにて思はずも爰へ出た」と語っている。「窟物語」と、書き伝へたること草や、草の芽出しの代々かけて、五穀成就民千歳、君の寿百億々万々、歳とぞ祝ひける」というのが結末である。

『赤松田心緑陣幕』（元文元年、文耕堂・松洛）の主人公は後醍醐天皇に味方するか北条方に味方するか苦悩する在地領主の赤松則村である。緑の陣幕は朝敵追討のしるしだが（第三）、文耕堂にとつて「緑」とは大地の色であらう。「余所は波風さはけ共枝をならさぬ赤松の、十かへり深き若緑ことしぞ、ちよの始めなる」と始まり（第一）、「こけむすやねをはひあがり又ひつくんで取て投、おきあがつてはなげかへす」と閉じられる（第五）。そこに、佐渡流罪の父資朝を尋ねる阿新丸の話が組み込まれている（「道行袂の浪路」第四）。

非人に身をやつし仇討ちを遂げる『敵討檻樓錦』（元文元年、文耕堂・松洛）には「深田の粘土面にべつたり摺付け、顔見られじと身拵へ、足音もせず藁屋に立寄り欺し討」とある（下巻）。田地の泥によって顔を隠し目的を遂げているのである。それゆえ、「今日の檻樓は明日の錦」となるのだろう。

『猿丸太夫鹿卷毫』（元文元年、文耕堂・松洛）は道鏡の謀反劇だが、「コレ土をかぢり菰を被り野垂れても、筋のない財宝貰て命を継ぐ俺らじやない」と語る養父母によって正体が暴露されてしまう。道鏡の足に鹿の毛が生えていることを明かすのは、「土に平伏」す養父母なのである。そのせいだろうか、本作は「五穀豊に民安全治る、国こそ久しけれ」と閉じられる。「悪に強いは善にも強い」という台詞は黙阿弥に受け継がれるものにちがいない。

『御所桜堀川夜討』（元文二年、文耕堂・松洛）では土佐坊が頼朝に命じられ、やむなく義経に夜討ちを仕掛ける話である。義経の正妻京の君は姿をやつし、母とともに安産を願う伊勢参宮に向かう。

山又山の土山に、さそふや嵐、散るや紅葉の乱れ乱れて、空に散りぬる散らし書き、ここはずりの水口や、田面に降りる、雁金の一行連なるごとくにて、跡や先やと子供の参宮おかげでの、脱けたとさ…

#### （第四「道行伊勢みやげ」）

この一節は「田面に降りる」という点で重要であろう。この直後、「田楽の由来」が詳しく語られるからである。静御前は危険な「土手の細道」を進んでいる。

「義経の首取て罷帰るか、さなくば昌俊がかばねを堀川の土に埋むか、二つに一つ」と頼朝の前で誓った土佐坊昌俊は、仇と狙う伊勢三郎にわざと討たれる。「昌俊が此からだ堀川の土とならずんば、鎌倉殿の誓紙は反古、生きては武士の名の穢れ」だからである。その後、偽の土佐坊となった番場忠太は弁慶に殺される。「五穀成就民ミ安全、百おく万歳末かけて治る、国こそめでたけれ」と閉じられているが、それは屍が埋められた土の力ではないか。

帝位をめぐつて争う『行平磯馴松』（元文三年、文耕堂・竹田正蔵・松洛）では「種蒔き」が「恋」と「国」にかわる。

春百花あり秋月あり、恋に怨有リ情あり。あざやかなる角角枕爛なる錦のふすま、我レ一人旦を思ふとは大和唐土おしなべて、夫を慕ふ恋草の、種蒔き初めて日の本の神代の法の道直に、御代を伝へて五十六代、清和天皇の

領し召ス国ぞ常世と、栄へける。

(第一)

清和天皇の後継を狙う雨夜の皇子を阻止するのが、在原行平である。「子として父の詞に背く不孝の罪、却て是を逆とや言はん、人々如何思シ召スと堂上堂下を見渡」す。行平の恋人松風に横恋慕する雨夜皇子は、「恋」と「国」、二つの意味で纂奪者といえる。松風は殺されるが、行平と親しくなった小藤こそ真の松風であったことが判明する。小藤の父親は次のように語られる。

須磨や明石の沖見れば、女浪男浪が袖打ち交し、汐諸共に情ケ汲、恋も月をも共に汲、月を隣に須磨近き、田井の畑の太夫とて汐焼キながらのつしりと、近年家富貴栄へ近郷に名を知られける。

(第二)

海音では海岸の埋め立てが問題となっていたが、文耕堂においては塩焼キが話題となるのである。塩焼キは一種の耕作であろう。「畑の太夫」と呼ばれているからである。「松」は行平のシンボルだが(「我も木蔭にいざ立寄りて、磯馴松の懐しや」)、文耕堂と三好松洛の署名にもなっている。文耕堂の作品にはしばしば「磯馴松」が登場する。

『小栗判官車街道』(元文三年、千前軒・文耕堂)は毒殺された男が蘇生する話である。

ばつくんの鹿毛の駒近ン在の田畠ふみあらし、耕作のさまたげと成りあまつさへ、耕す農民木こるわらんべやや共すれば、人まぐさにはまれ人の歎大かたならず

(第三)

馬が田畑を踏み荒らすところを見ると、文耕堂における馬と耕作の対立関係は明らかであろう。こうした馬を乗りこなすことで、小栗は文耕堂ドラマの主人公となるのである(「念なふ大地に乗おろし心も共にいさみの鞭、かさねてちやうちやうはつしと打テば……」)。

毒殺されたのは小栗ではなく、実は阿保の太郎の父、門番不寝兵衛であった。照手姫が車を引いて運んだ熊野の湯で蘇生するが、小栗の車街道として喧伝される。「そせいの小栗は帰国の旅、足よは車引連て、帰るも実や偽りなき是、本ン宮の湯のふしぎ、神の靈験遊行の徳合せて三つの御山路に、車峠や車坂小栗の車街道と其名は高く聞へけり」とある(第四)。

『ひらかな盛衰記』(元文四年、文耕堂・松洛・浅田可啓・竹田小出雲・千前軒)は木曾義仲の遺児を盛り立てる話だが、義仲は「泥中」を潜り抜けている。

義仲が胸の鏡くもらぬ証拠は天道ならで誰レかしらん、泥中の蓮も汚れぬ花の、栄へを見ず、我悪名は後代に残し、身は戦場の土ときへ首は大路にさらされて、恥に恥を重ん事返す返すも口惜しさりながら… (第一)

義仲は平家から三種の神器を奪い返すため謀反人を装い、討ち死にをするのである。「巴は馬を、乗とばし熊の子渡シ燕のもじり獅子の、洞入なんどといふ、手綱の秘密に声添て四足を土に着ケばこそ、宙をかけらし地をくぐらし蹄にかけんとすきを待ちしばしあしらふ」。義仲の胤を宿した巴御前もまた乗馬の名手だが、和田義盛に預けられることになる。「義仲の首今井が首、土中にうずみ跡弔はばやと思へども、院の御気色はかりがたし」と巴御前は迷っている。

風もはげしき、夜半の空星さへ雲におほはれて、道もあやなく物凄き裏は田畑を隔の大藪、押分ケ搔分ケ、忠義一途にかいがい敷、おふでは片手に若君抱き山吹御前の御手を引、かけ出て息をつぎ、扱もひあいや危ひ事…

### (第三)

義仲の遺児は殺されそうになるが、それを救い出すのが腰元お筆である。結末ではお筆と和解した梶原源太景季が華々しく出陣する。「八騎を相手に早咲きの梅も源太も咲がけに、勝色爰に未開紅、飛鳥の飛梅秘術をつくし、今日の軍の好文ン木と、切ツて廻れば白梅変じて紅梅の、血汐流れて敵もひるまぬやり梅に甲も打落されて、大わらはの姿と成て引なひかじと春風に花を散らして、戦ひける」とあるが(第五)、好文木こそ文耕堂の商標ではないか。父を前に景季は「大地にひれ伏」ている。

『今川本領猫魔館』(元文五年、文耕堂・松洛・可啓・小出雲・千前軒)は今川了俊の息子仲秋が將軍義政によって本領を安堵される話である。重病になった了俊は生け花に心を寄せるが、土壌が重要な要素として働いているにちがいない。了俊の舍弟駿河守定広とその陪臣梶田民部に向かって「病家に出船の花を生る事」を批判した執権大道寺新左衛門が殺される場面は大地的な想像力に満ちている。

梶田主税は後れ馳、定広の傍へさし寄つて宝蔵堀抜きの通ひ道、あれにてつぶさに承り、先は御安堵、兄民部がおすすめ申し、片桐才蔵といふ浪人、古今無双の忍びの上手、羽衣を奪い取れとのお頼み、相違なくかくの如く

いたしたれば、はや御願成就し、駿河一国立てうと伏せうとお心まかせ、思ひ廻せば片桐才藏、人間の及ばぬ所為、アアコリヤコリヤ声が、其の才藏が事沙汰なし沙汰なし、仲秋を罪に取つて落す内証秘密の通ひ道、それとは知らず穴入り、老い耄れめが臨終まへ、たつた今しまふてやると、主従笑壺に入り込んだる…（第二）

「天の羽衣」を奪われ、大地に突き落とされる。新左衛門は「土に汚れし一通」を拾い卑劣な策略を知るが、時すでに遅く殺されてしまうのである。猫を偏愛する仲秋に対して、蠢く鼠は大地的といえる。

『将門冠合戦』（元文五年、文耕堂・松洛・可啓・小出雲・千前軒）は将門の急所を狙つて打ち倒す話である。急所を知らず将門を狙つた国香は失敗し（「足下にしつかと踏み付くる」）、娘婿の藤太に預けられる。第二の冒頭は印象的である。

魚行けば水濁り、鳥飛べば毛を散らすと、古語によるべの井の本に、立つはねつるべの立木より、猶朽ち勝る辻堂の、屋根は千草の野をなせり、走り苦しき玉水姫、将門が毒蛇の口、忍び出は出たれども、都へ帰らん道知らねば（中略）辻堂に立ち休ひ胸撫で下ろし…（第二）

屋根に「野」が広がる辻堂、これこそ文耕堂の作品にふさわしい舞台装置であらう。地藏菩薩の力で玉水姫は助けられ、味方と再会するからである。「主従朽ちせぬ対面も、地藏菩薩の引き合い、自愛に下りし訳は、アノ辻堂の中で残らず聞いて居りました…」。再会したのが実は将門の姉で、蟀谷が将門の急所だと明かす地藏尼である。沼田村の百姓を夫として、一人娘に婿を取り孫を授かったという。しかし、将門の血を嫌った婿に孫を殺される。地藏尼の婿、村田五郎は「我以前沼田村の大六とて、鋤鍬秤の業なりし」と語っているが、文耕堂の作品には農耕に携わった人物がしばしば登場する。

『伊豆院宣源氏鏡』（寛保元年、文耕堂・松洛・小川半平・小出雲・千前軒）は源氏再興の話だが、冒頭にみえる「畔」は耕すべき畔ではないだろうか。

灼々たる園の中の花はやく発いて先づ萎み、遅々たる谷の畔の松鬱々として晩翠を含めりと、詩に作り和歌に詠み続けつつ久方の、宝しろしめす安徳天皇と申し奉るは、平相国入道に外戚の由縁ましませば、政務は武家の我意として、威光輝く六波羅や…（第一）

この六波羅が打ち倒されるのである。結末では『御所桜堀川夜討』と同じく夜討ちが強調され、「七珍万宝降る雪は、豊年の代の貢物、国土安全民繁昌、富貴寿命は何時まで、のべて尽きせぬ君が代は、万々歳とぞ祝ひける」と大地の豊かさが語られる。

『新うすゆき物語』（寛保元年、文耕堂・松洛・半平・小出雲）では薄雪姫と左衛門が無実の罪を負わされ、それぞれの父親が自害する。陰腹、三人笑いの場面として知られるが、二人を逃がすため腹を切りながら、妻の前で苦痛にこらえて無理に大笑にする暗さが印象的だといえる。中巻「うすゆき姫道行」には「宿からうよりは幸、辻堂が有爰にねて、あすはさうさう在所へと、地蔵がうしを、押明て、見ればしゆせうな仏様、宿をばかして給はれ」とあるが、この辻堂ですれ違いが起こる。「左衛門みち行」には「しらぬ仏と云ながら、辻堂ならば地蔵尊くもりなき身をあはれみて、ふたたび出世をせさせ給へと伏拝ミ、ふしおがみ、しばしは爰に、ゐながらも恋しき人の辻堂に、有リ共しらず行過る、ほゐなさいはんかたもなし」と続く。

上巻には清水寺の段があり、下巻は「名人と呼ぶる人はおしなべて、おのが氣生に諂なく、つくろひかざらぬすぐ焼刃、五郎兵衛正宗とて音に聞へし刀鍛冶、竜田の里の片辺に世渡るわざの劍の刃、おのが数多鋌出す名作……」と始まるが、この一節は明らかに名作を数多く語った竹本義太夫を暗示している。義太夫はかつて清水五郎兵衛と呼ばれていたからである。本作では、名人五郎兵衛が罪を犯した息子を改心させている。

## おわりに——陰陽の分岐

以上の論述は、紀海音と文耕堂、それぞれの一面を提示したにすぎないが、海の主題や耕作の主題などが浮かび上がってきた。もちろん、豊竹座と竹本座の相違を決定づけたのは、豊竹若太夫と竹本政太夫の芸風であろう。しかし、東風の明るく華やかな芸風、西風の暗く地味な芸風は、そうした主題群にもかかわっていたように思われる（4）。「歌舞伎ハ陽氣の器なれば、実ハ薄くとも花あるを好とし、操淨瑠璃ハ陰氣に属する物なれば、実をもてむすぶを勝

れりとす」『客者評判記』史料集成六」という一節はよく知られているが、競合するグループは刺激し合って、それぞれに分岐を加速することになる。海音の作風は「陽」のほうへ、文耕堂の作風は「陰」のほうへ展開していったといえる〔5〕。

## 注

〔1〕 紀海音を受け継ぐのが豊竹此吉座の菅専助である。『鯛屋貞柳歳旦開』（安永五年）は文字通り、鯛屋をタイトルにしている。

〔2〕 ただし、『今様東二巴』（元文元年頃）では海音『三勝半七二十五年忌』の舞台が江戸に置き換えられている。海音固有の大坂がたちまち江戸化されてしまうのが演劇の自在さである。

〔3〕 長谷川千四『敵討御未刻太鼓』（享保十六年）に「いそがひじつゑもんがかざり馬、其ほか家中のしよれきき、足白四ツ白ひざくりげ、とらつきげさびつきげ、はなをそろへてばさきの、なみきのまつにつながれて、いばふるこゑのゆゆしさはかみも、こころやいさむらん、太兵衛目録に引合せ、ヲフいづれをいづれ共いはれぬけつかう、見」とあるが（上巻「神事馬場揃へ」）、これは『北条時頼記』（享保十一年）でヒットを飛ばした豊竹座の並木宗輔を示唆するようにみえる。並木に繋がれ見事な神品が並んでいるからであり、すぐさま競合を煽り立てているからである。磯貝実右衛門を殺めた島川太兵衛は御堂前で討ち取られるが、竹本座の千四自身は「御堂の駒よせの内に遊ぶ幼子」というべき存在なのかもしれない（下巻）。敵討ちが果たされたのは「おやつ」の刻限である。本作の友蔵は宇和島から大坂へ出るが、前作『京土産名所井筒』（享保十四年）の彦坂左膳は播磨から江戸に出る。千四の単独作に共通するのは故郷から飛び出した男の存在であり、長谷寺から還俗した千四自身の境涯が反映しているのかもしれない。

〔4〕 「近松の作品の趣向には、悠久の大地につらなる根があるのに対して、海音の作は、趣向が趣向として遊離し、根本のテーマと結びついていない」（諏訪春雄『近世戯曲史序説』白水社、一九八六年）と評されるのも、海の主題にかかわっているはずである。なお、文耕堂の謀反劇については二川清「謀反劇としての二の替り狂言の成立」（『都大論究』四〇、二〇〇三年）がある。

〔5〕 杉山其日庵『浄瑠璃素人講釈』（岩波文庫、初出一九二六年）のレトリックは興味深い。「腹の底から淀まない大波の一ツ一ツ打ような事になっていなければならぬ」と語るのは豊竹座の豊竹若太夫についてであり、「耕耘幾多の艱難の経過となつて、始めて三段目、四段目の切場と云う米や飯になる」と語るのは文耕堂作についてである。同書には「語り殺す」という物騒な文言が頻出するが、浄瑠璃の語り手はその物語内



容を模倣しているかのようだ。

## 〈キーワード〉 紀海音、海、都遷り、文耕堂、耕作、堂

〈要旨〉 紀海音と文耕堂の作品群を検討すると、海の主題や耕作の主題などが浮かび上がってくる。もちろん、東西の相違を決定づけたのは、豊竹若太夫と竹本政太夫の芸風であろう。しかし、東風の明るく華やかな芸風、西風の暗く地味な芸風には、そうした主題群もかかわっていたように思われる。

〈付記〉 本稿は本学特別研究費によるものです。